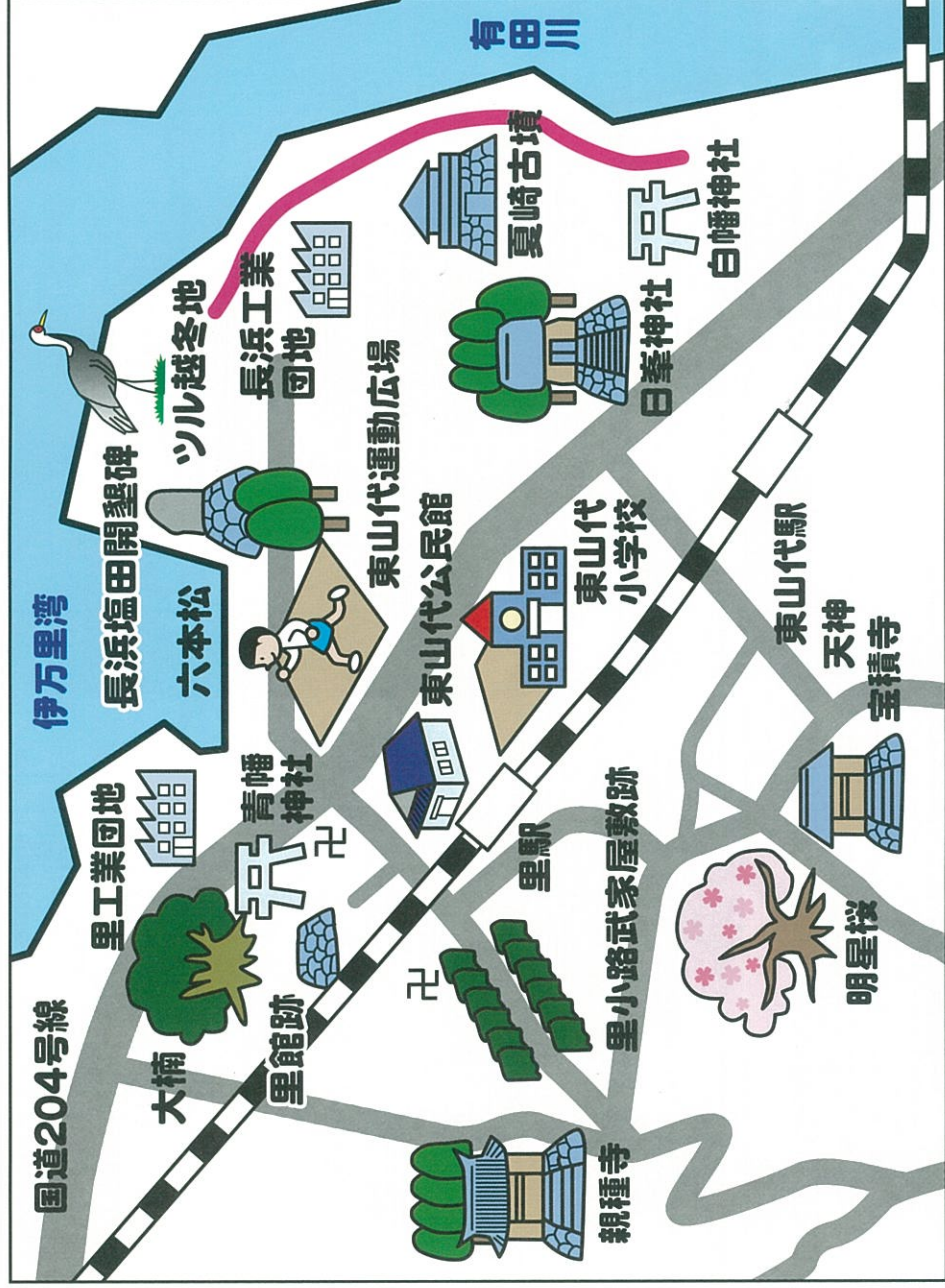


白幡神社 ⇒ 夏崎古墳 ⇒ 長浜干拓地・ツルの飛来と越冬地
道のり3.0km



白幡神社



としたという故事(昔あったこと)によると伝えています。

その時代はつきりませんが、現在の社地(神社の地域)は、氏子である日尾区民によって、長浜上白幡の旧社地から遷座(神仏の座を移すこと)されたと言われています。村の古老の話では、「火災で神社が焼失したためだ。」ということです。

[神功皇后の出兵は、後に作られたもので、歴史上の事実ではないという学説があります]

松浦党祖源久の長子であった源直は、久安年間(1145～1151)に東山代里の地に政庁の館を設けましたが、その鎮守(その地を鎮め守る神社)として、青幡神社と共に白幡神社を創建(初めて建てること)し、青幡を一の宮、白幡を二の宮としました。

養老7(奈良720)年に完成したとされる日本書紀に「神功皇后が新羅や百済など(今の韓国の一部)に兵を出した」という話があります。社伝によると、白幡、青幡の社号(神社の呼び名)は、その時の旗幟(はたのぼり)に青旗、白旗を立て先鋒(先頭にたつもの)

夏崎古墳



日尾の丘は、長浜台地のほぼ中央から東の方向に突き出た細長い台地になっていて、夏崎古墳は、その東北端にあります。

江戸時代の干拓(ちりつち)工事で、盛土(もりつち)が削られ、石室の天井が露出してしまい、元の形はよくわかりませんが、高さ約5m、直径約24mで、円墳のような形をしており、古墳内部には、幅1.9m、奥行約2.1mの横穴式石室があります。

大和時代の五世紀後半から末ごろにつくられたもので、奥の石室からは甲冑(よろい)やかぶと、鉄製の斧や剣、刀などが出土しました。中でも、かぶとは、「小札鉾留眉庇付冑」とよばれ、佐賀県内でも二例しか出土して

おらず、県の重要文化財に指定されています。

長浜干拓 — ツルの飛来・越冬地



長浜干拓の地は、伊万里湾沿いの低平地であるため水害常襲地で、たびたび冠水(水をかぶること)被害をうけていました。水害被害を防止し、農地を広く活用するために、土地改良計画が作られ、昭和21年から昭和38年までの長い歳月をかけて造成工事が進められました。

平成4年度から、大型排水ポンプの設置、排水路拡幅工事などが行われ、以来、周辺の水害被害は減少しました。現在では、農業経営の安定と向上を目指して真剣な取り組みがなされています。

昭和50年中頃から、毎年、数羽のマガツルが飛来し、ときには越冬することもある。市民の関心を集めています。平成15年から、干拓土地改良区と伊万里市が協力して、干拓地内にデゴイや音響設備を設置するなど、ツルの誘致(誘い寄せること)活動を行っています。